

第1章 天草フィールドワークにおける寺社・信仰調査

篠原啓方

はじめに

寺社調査班では、寺院・神社およびキリシタン関係の古文書を中心とする調査とインタビュー、そして観音信仰の現地調査・関係者インタビューを行なった。以下、それについて述べる。

一 調査内容

1. サンタ・マリア館の調査

1) 調査概要

サンタ・マリア館は天草市有明町大浦にある私設の資料館だ。館長は浜崎献作さんで、歯科医をされながらキリシタンの研究と同館の運営を行なっている。今回の調査対象は、館蔵品のうち文書資料の全点および尊像であり、これらの撮影を行なった。文書類は86点あり、宗門改帳、宗旨御改絵踏帳といった江戸時代におけるキリシタンの取り締まりに関するものが多く、天草一揆の軍記物や国郡全図といった地理書もある（図1）。その他の文字資料としては、禁教の札や島原城図などがある。また同館には「マリア観音」をはじめ、仏教の尊像をキリシタン信仰の対象に見立てた像の実物や写真、墓石、碑石も展示されている。これらはキリシタン信仰を考える上で重要な資料となる。調査では展示品のうち70点



図1 仏母庵観音堂由来書



図2 マリア観音

を撮影した(図2)。

2) インタビュー

キリシタン研究やサンタ・マリア館設立の動機などを浜崎館長にうかがった。その内容は次の通り。

父(浜崎栄三さん)が民俗の研究者で、自分も40年くらい前から一緒に調べはじめた。そうするうち、自分は隠れキリシタンの末裔なのではないかという思いを抱き始めた。だが一番の動機は、キリシタンの歴史を抜きにして天草の歴史を語ることはできないという強い思いである。

天草という片田舎にコレジオ(大神学校)が建てられ、当時世界有数の大学であったポルトガルのコインブラ大学の知識やそこに関係する人々が到来し、天文学をはじめとする学問、そしてキリスト教という精神文化がこの地にもたらされた。天草が世界史の中に組み込まれた瞬間であり、それはほんの7年間でしかなかったが、日本のどこにもない文化が開花した。これらの歴史を埋もれさせてはいけなかったと思った。

オラシヨに興味を抱いた。キリシタン時代に天草で出版された『どちりなきりしたん』と、資料や口述のオラシヨを比較すると、まったく異なっている。研究を進めるうちに、唱えている本人も意味が分かっておらず、まじないと化していることが分かってきた。彼等はキリスト教徒という価値よりも、先祖代々の教えを守り、伝えることを大切にしている。それゆえ近代に入ってもカトリックを受け入れられない人々がいた。当然時代を経て、信仰も変容している。そういった点に感動し、研究をしてきた。

マリア観音も興味深い資料である。中国で製作された子供を抱いた観音像が天草に入ってくると、キリシタンはマリアと見立て、崇めてきた。最近ではこれらの観音像は中国にあった当時からマリアとして崇められてきたという研究もある。果たしてそうであったのか非常に関心がある。

遺物は、民俗研究のために数点は持っていたが、本格的な収集は、研究への決意と資料館の設立を決めてからである。天草のものは天草にとどめておくべきだと考えた。地域的に見ると、天草島の北部は多くのキリシタンが一揆に参加して殺され、根こそぎ弾圧された。だが西南部のキリシタンは一揆にあまり参加しなかったため、集落単位で残っており、遺物を保管しているところが多い。彼らを訪ね歩き、遺物の譲り受けをお願いしてきた。先祖代々の大切なものだから譲れないという人もいれば、必要ないから引き取って欲しいと言う人もいる。非常に警戒心が強く、なかなか心を開いてはくれないが、真摯に収集の動機を説明し、理解が得られるよう、努めている。キリスト教は世界に広がっているが、世界各地で土着の信仰や慣習と混じりながら根ざしていく。そうしたものを含め、どこまでがキリスト教だと言えるのか、そのあたりを柔軟に捉える必要があると考えている。

館長のお話から、郷土史への情熱が強く感じられた。同館には我々が調査したもの以外にも多くの展示品があり、キリシタンが自らの信仰を証すために残した様々な遺物に触れることができた。これらの品々が歴史の遺産となり得たのは、ひとえに研究者の視点を持ちつつ、長年にわたって郷土に愛情を注

いでこられた館長の努力の賜物である。頭の下がる思いであった。

個人的に気になったことは、キリシタン遺物に込められた意味である。館長のご説明では、彼らが墓石や様々な遺物に残した小さな痕跡は、聖書や福音に基づいて解釈されるものであった。しかしオラシヨの説明にもあるように、彼らはもはやそれが何であるのかを理解できず、その目的にも変容がみられた。だとすればキリシタンは、キリスト教の知識に基づいた我々の解釈と同じ理解に立ち、それらの痕跡を残したと言えるのであろうか。もし違うのであれば、彼らはその痕跡にどのような意義を見出していたのか。さらには、キリスト教もしくはキリシタンの視点とは異なる解釈も可能ではないか。さらにこれらを検証していく必要があるのではないかと感じた。

2. 寺院・神社の調査

天草郡苓北町所在の寺院・神社を調査した。古文書を所蔵している神社1，寺院4の5カ所を訪問し、文書の撮影を行なった。概容は次の通り。

1) 志岐八幡宮（苓北町志岐3）

志岐八幡宮の宮司は宮崎國忠さんで、ご本人で第19世となられる。創建年代は定かではないという。御祭神は品陀和氣命（応神天皇）、息長帯比売命（神功皇后）、武内宿禰命である。文書は、裁許状や家系図など9点を調査することができた（図3）。

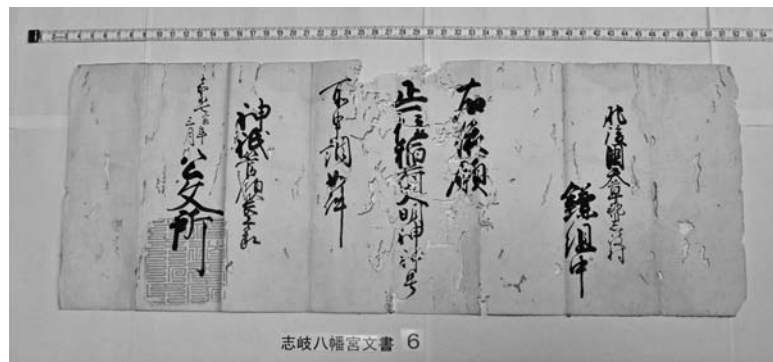


図3 鎌組八幡宮稲荷社神号申請書

2) 飛龍山瑞林寺（苓北町富岡3170）

瑞林寺は曹洞宗の寺院で創建は正保元（1644）年で、開山は一庭融頓。住職は恭賢（森田）俊弘さんで、ご本人は第28世にあたる。文書は証文や明細帳など19点を調査することができた（図4）。

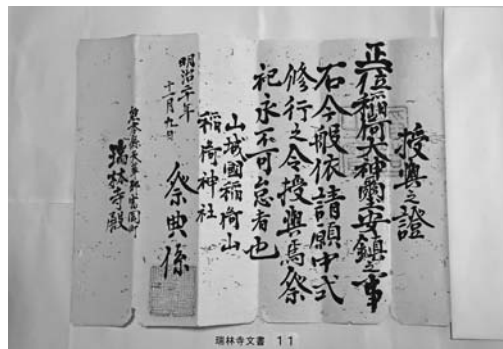


図4 授與之証

3) 向陽山鎮道寺（苓北町富岡2452）

浄土真宗（真宗大谷派）の寺院。創建は文禄元（1592）年で良規上人の開基。現在の住職は和氣孝友さんで第18世にあたる。

文書の多くは現在貸し出し中で、寺に残っていた4点を調査することができた（図5）。鎮道寺調査の詳細は、本書所収の王海論文で紹介されている。

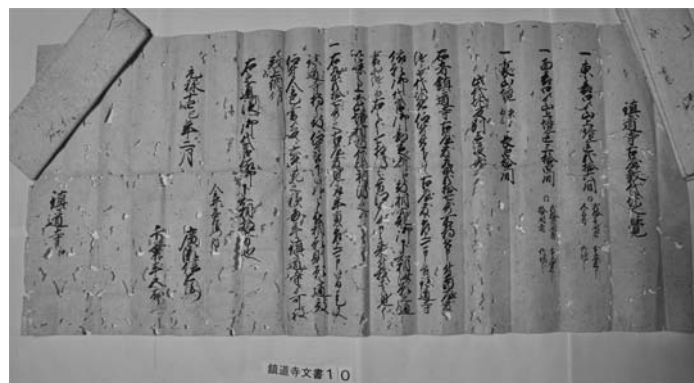


図5 鎮道寺古屋敷代作之覚

4) 婦命山寿覚院（苓北町富岡2450）

寿覚院は浄土宗の寺院で創建は寛永19（1642）年、應譽鉄秀の開山である。現在の住職は心誉（山城）賢亮さんで、ご本人は第33世となられる。文書は覚書や仁王門図面など24点を調査した（図6）。



図6 掟 瑞祥院殿靈誉宗巖居士

5) 萬松山国照寺（天草郡苓北町志岐1360番地）

国照寺は曹洞宗の寺院で、創建は正保元（1644）年、一庭融頓の開山である¹⁾。現在のご住職は第20世の活融（田中）琢道さんである。同寺では現在、天草アーカイブズが撮影（2004年3月）した複写のみを所蔵している。調査では全76件の文書を撮影した（図7）。

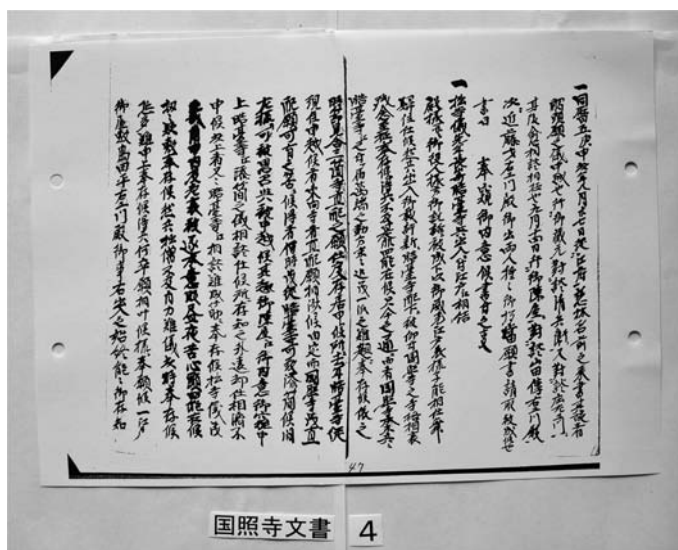


図7 万松山功德林空劫記録

以上の文書については現在、整理作業と目録の作成を進めている。

1) 国照寺文書「由緒書」および天草史談会（鶴田文史編）『天草寺院・宮社文化史料図解』（西海文化史研究所，2004），56頁

3. 観音信仰の調査

宗教職能者による寺社信仰とは別に、天草には集落単位の民間信仰が存在する。富岡城下の巡検時にも、恵比須・地藏・観音が祀られている祠を数例見た。それらのうち苓北町の山中に祀られ、参詣者が多いとされる²⁾ 龍岳観音、水の元観音を調査した。

1) 龍岳観音

龍尾観音とも言う。観音を祀る観世音堂は、本渡から富岡に向かう広域農道を上り、山の中腹あたりで脇道に入った場所にある(図8)。堂入り口は東北東向きで、堂内には15体の尊像が安置されている(図9)。また堂の北隣には、休憩所のような東屋が設けられている。



図8-1 龍岳観世音堂遠景



図8-2 龍岳観世音堂

由緒については苓北町教育委員会より頂いた案内文があり、それを以下にまとめておく。

文政4(1821)年、城木場、松山勝之助らによって建立された。以来今日まで坂瀬川住民の雨乞いの神様として参詣されている。昭和54(1979)年4月の改築時には、新たに出雲大神が祭祀の対象に加えられた。堂内には現在、大小15体の尊像が祀られている。また拝殿裏にはほら穴があり(図10)、かつてその穴に落ちた犬が、富岡の西海岸に出てきたとのいわれがある。平成6(1994)年までは近くの有志によって祀られてきたが、高齢になられたため、鶴区民が4班交替で参詣者に料理を振る舞っているという³⁾。



図9 観世音堂内部



図10 観世音堂裏のほら穴

2) 苓北町史編さん委員会『苓北町史』1984年、527頁

3) 祭礼の日を指していると思われる。

2) 水の元観音

龍岳観世音堂から広域農道を富岡方面に進み、峠にさしかかったところに水の元観音を祀るお堂がある（図11）。堂の入り口は北北西向き、観音は堂内で西南西に向く（図12）。堂の背後の岩壁からは水が湧き、その前にも観音像が祀られている（図13）。堂内のものが新像、堂外のものが旧像である。お堂は現在、志岐山区の人々によって管理・運営されている。

水の元観音は志岐氏と黒染の池（黒染溜池，図14）⁴⁾にまつわる説話がある。その概容は次の通り。



図11 水の元観音堂



図12 水の元観音堂内



図13 お堂裏の観音像

江戸から志岐の黒染めの池にたどり着いた「お琳」という娘が、この池の主で水の観音に仕える河童太郎（がわたろう）に、「水神の命により、汝の腹をかりて人に生まれ変わって百姓の見方であるキリシタンに力をいれよう。汝は志岐城に行き、城主麟泉をたずねるように」とのお告げを受ける。お琳が麟泉のところに行くとき手厚くもてなされ、まもなく男子を産んだ。子はたくましく成長したが、背丈が一尺八寸と非常に小さく、麟泉は彼を「一尺八寸太郎丸



図14 黒染の池

（かまつかたろうまる）」と名付け、家臣として取り立てた。一尺八寸太郎丸は小さいが力が強く敏捷で、戦において数々の手柄を立てた。麟泉は「これは観音菩薩のおかげに違いない」と考え、家来に志岐山に祠を建てて水神を祀らせた。これが水の元観音で、ここの水は、干ばつ・飢饉の時に枯れることなく、不老長寿の霊泉として親しまれてきた⁵⁾。

4) 龍岳観音から広域農道を富岡方面（上り坂）に進むと、左手に見えてくる大きな溜め池。地理的には龍岳観音と水の元観音の間に位置する。

5) 浦本一市『富岡の民話』（1982）、166～169頁の「四十八一尺八寸太郎丸」を要約したもの。

このような由緒をもつ水の元観音について、お堂を管理・運営する志岐山区の区長さんにお話を聞くことができた。インタビューの内容をまとめたものは次の通り。



図15 水の元観音堂石碑

記録によると、享保5（1720）年、国照寺の僧侶が山に登って接待をしていた（水を与えたりしていた）という⁶⁾。これ以前から観音が祀られていたと思われ、僧侶の庵があったのではないかと思う。ここは富岡と本渡を結ぶ一番近い道（峠）であり、そこにある湧き水、のどの渇きを潤す絶好の休憩場所である。

現在は像を2体祀っている。文政7（1824）年、前の仏像の首や足の傷みがひどくなり、有志が造り替えた。前のものも捨てるわけにいかず、2体とも祀っているが、そのいきさつを明らかにするため、碑を刻んで立てた（図15）⁷⁾。この時から、祭りの日を旧暦の7月17日と定め、開催するようになった。記録によると、祭りには美男美女が集ったといい、村人がこの場所に入るようになったのはこれ以降だと思われる。

幕府がなくなり、近代化に進む中で、ここを管理する人間がいなくなった。幕府から志岐村（18の集落があった）への引き継ぎを依頼されたが、志岐村からこの地までやって来て管理するのは大変なので、我々（志岐山区の人々）が管理するようになった。

祭りの前の日には、木をきったり泥を埋めたりして道をきれいにした。「せっちゃや」⁸⁾は、集落の人々が一斗樽の酒を買って持っていき、また当番制で食べ物を持ち寄り、訪れる人々をもてなした。

昭和10（1935）年だったと思うが、天草にバスが登場した。その後戦争になり、食べることや戦争に勝つことが優先され、祭りの維持が困難になり、宗教心も希薄になって参加者が減ったが、それでも7月17日の祭りだけは維持していた。当時は建物も修理できず、トタンをかぶせて仏像を保護した。

その後広域農道が富岡－本渡間にできた。昭和54（1979）年の完成とされるが、同52年には利用が始まっていた。当時120万円のお金で作った。そうすると信仰する人も増え、日本が良い時代だったこともあり、多くの人たちが訪れたと聞いている。

ただ区の人口は、かつて40軒ほどあったのが17～18軒となり、当番も二年に一度だったのが毎年になると、祭りの日が来るたびに仕事を休むわけにもいなくなった。そこで平成3（1991）年くらいだったか、旧暦をやめて7月の第3土・日曜の開催に変更した。

これを機に信者さんが増えはじめ、従来のテントでは人が入りきらなくなった。そこで平成18

6) 苓北ふれあいガイド協会の資料によると、古記録に「国照寺の尼僧である永心・法要という2人の尼僧が、観音像の蓮台の下に水盤石を置いて湧き水を注ぎ、往来人の利用に供した」とあるという。

7) 堂内に安置された観音像の下にある。碑文は漢文で比丘賢令の識という。堂内壁上部に掲げられた板には、碑文と書き下し文が記されている。

8) 接待の意か。祭りの日のことを指すと思われる。

(2006)年、お堂の前に幅3m、長さ10mのドームハウスを作り、一度に約40人を接待できるようにした。それまでは畳を敷いていたので中で動きにくかった。

祭りの日は一晩に200~250人くらいのお客さんが来てくれる。この日は志岐組合の人たちが手料理を持ってきてくれる。タケノコの干したもの、わらび、つわのこ、おこわ、ちまきなど、直接作った田舎料理が、大変喜ばれている。昔もこんな風にお祭りをしていたのではないかと思う。

平成19年には、水の元観音にちなんで「水の元太鼓」というのを作った。おりしも太鼓の先生が練習場所を探していたため、夜中でも練習できる山の中の土地を提供し、子供にタダで太鼓を教えてもらうようお願いした。太鼓によって山奥の集落である志岐山の存在をアピールし、町おこしや活性化に利用している。みんなの太鼓の製作には、宝くじ協会の助成（250万円）を受けた。また高齢者は「健康作り太鼓」というものをしている。

次に、前述の関連説話や龍岳観音との関係についてうかがった。また龍岳観音は雨乞いの観音として知られるが、水の元観音にはそういった性格もあるのかについてもうかがった。内容は以下の通りである。

そのような説話は知らない。水の元観音は、黒染の池や龍岳観音とは直接関係ない。山の峠のてっぺんで水が湧くから水の元と呼ばれるのであり、黒染の池はそれより下にあるので、関係ない。水の元の裏に三角池というのがあり、天草四郎が室を埋めたという伝説があり、こちらは関係がある。

観音様の横にある石の桶は富岡の「ますだはんべえ」⁹⁾という人物が、今から200年くらい前に寄付したものである。

龍岳観音は、「つる」¹⁰⁾の人々が管理している。一緒に頑張っていこうとの思いで、水の元観音と同じ日にお祭りをしている。いつからそうなったかははっきりしないが、7月の第3土日と決めて以降だと思われる。

水の元観音には特に雨乞いの神様という性格はない。我々が祈るのは家内安全や無病息災などである。

次に湧き水についてうかがった。インタビューの前に調査に参加した大学院生が水を飲んだところ「甘い」とのことだった。

水の元のもの、水が白く濁っている。水質検査によっても何も問題ないことが分かっており、安心して飲める。あれでコーヒーを飲んだら大変美味しいという話であった。真っ青に済んでいると「男水」といって硬く、やや白く濁っていると甘くて柔らかく、体に良いのだという。

9) 増屋半右衛門のことと思われる。彼が文化12（1815）年に奉納したという石製の桶が堂内に置かれていた。

10) 現在の苓北町坂瀬川鶴のことと思われる。松原川中流沿いの集落。

2年前、志岐の文化祭において、水の元観音が表彰された。その時7つほどの団体がいたが、その中で町の活性化を担当する県の機関に勤める人が、大分の例を引きあいに出して「水売って生計を立てたらどうか」と勧めてきた。しかし売れるほどの水量は出ないので、それは無理だと考えている。ただ管理していく上で資金は必要なので、賽銭箱を置いたこともあった。だがどれだけ鍵をかけても盗られるので、台に溶接したら台ごと持って行かれた。困り果てて、しばらく置かずにはいたが、花立ての中に置いていく人や、お金を置いて参らないと効いた感じがしないと言う人が出てきた。そこで国照寺の和尚さんに相談すると、「上がったものは低くなるのが道理だ。あんたたちも低くなって、向こうも低くなって、残ったものが自分たちの金だと考えてはどうか」と言われた。そこで、仏前に小さな缶を置くことにした。

水の元観音にまつわる、具体的な由緒と経緯を聴くことができた。管理・運営に携わる方の祭りの維持に対する苦勞と情熱、誇りが感じられた。

説話をご存じなかった点は意外であった。水の神様としての畏敬の念はあるが、運営者としての責任や意識をより強く感じた。過去の説話として記憶の片隅にしまわれるのではなく、現地の人々の「生きた信仰」である証でもあろう。

お話によれば、志岐山集落の人々が訪れるようになったのはおおよそ19世紀前半、管理・運営にかかわるのは明治以降である。参加者から運営者へと立場が変化したわけであるが、それ以前にも志岐山には伝承がなかったのだろうか。だとすれば、現地における信仰と、説話伝承の残る地は別であったということになる。

気になったのは、明治に入って管理・運営を任された経緯である。お話ではあそこには僧の庵があり、またある程度幕府の管理下に置かれていたが、幕府がなくなったため志岐村に管理が委託され、志岐村からさらに志岐山集落に依頼がきたとのことであった。幕府による管理と、庵の僧侶の居住が整合性を持つものであるのかは判断しかねるが、いわゆる志岐村に依頼できる立場の「お上」が関与していたということになる。

民間信仰の担い手の意識、そしてそれとは異なる伝承の記憶は、天草に散在する他の観音・地藏信仰にも見られるのであろうか。今後の研究テーマや課題設定の参考となり得る興味深い事例であった。

三 資料紹介

ここでは、筆者が興味を持った文書を一例挙げておきたい。サンタ・マリア館で見た文書のコピーで、整理番号はサンタ・マリア館所蔵文書83, 84である(図16, 17)。形状からみて折本と思われ、サイズは折りたたんだ状態で縦一尺五寸(約4.5cm)、横三寸(約9cm)である。来歴がはっきりせず、浜崎館長は偽物かもしれないという。ここでは真偽についてはひとまずおき、用語を中心に文書作成の年代を考えてみたい。

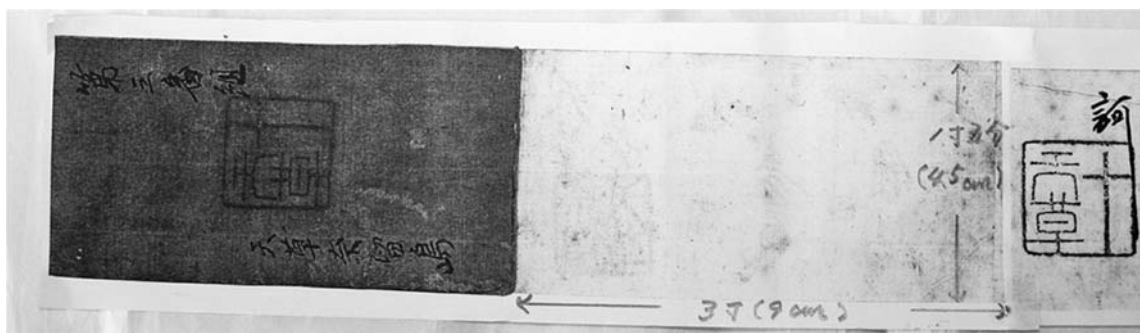
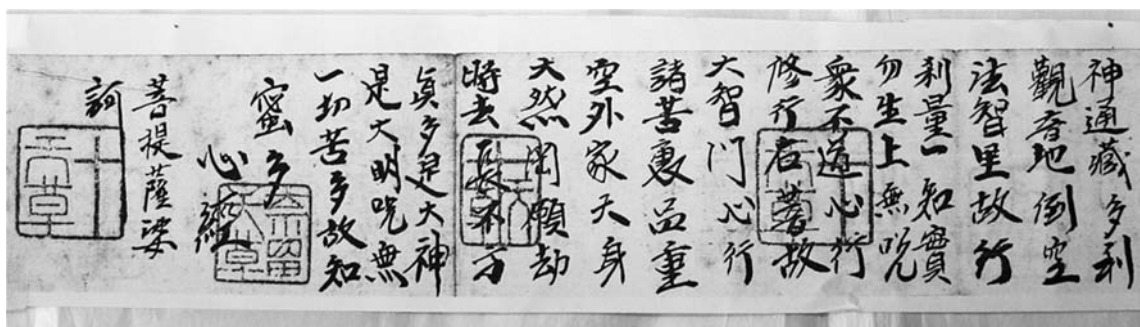
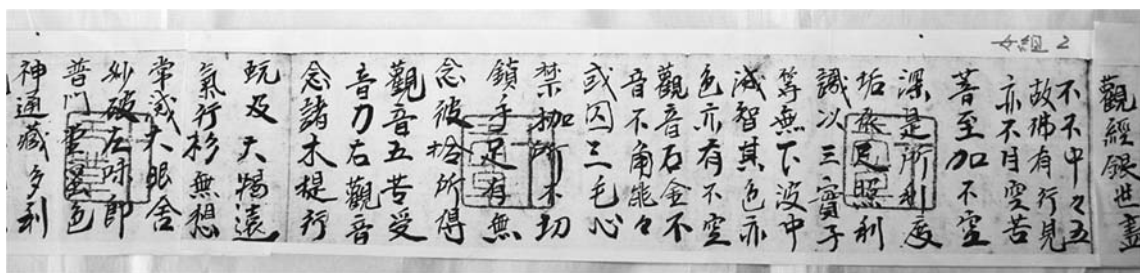
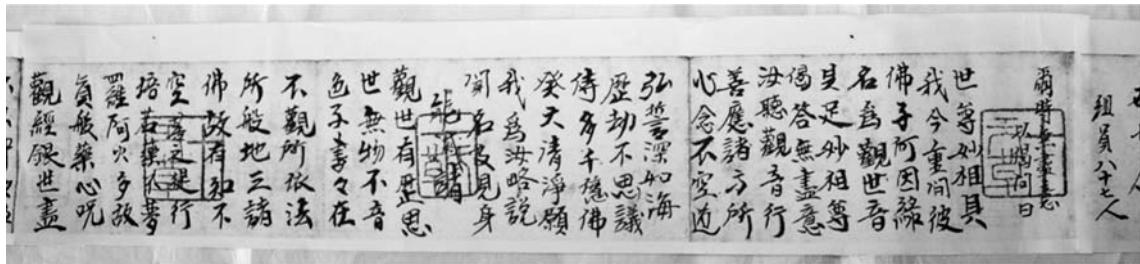
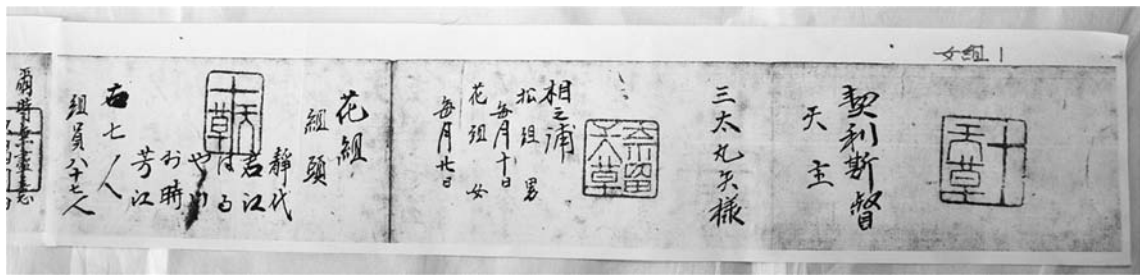


図16 文書83 (1)~(5)



図17 文書84 (1)~(5)

<p>1. 資料翻刻</p> <p>1) サンタ・マリア館所蔵文 書83番</p> <hr/> <p>[印①]</p> <p>契利斯督 天主</p> <hr/> <p>三太丸矢様</p> <p>[印③]</p> <p>相之浦 松 組 男 毎月十日 花 組 女 毎月廿日</p> <hr/> <p>花組 組 頭 静代 君江</p> <p>[印②] はる やい お時 芳江</p> <p>右 七 人 組員八十七人</p> <hr/> <p>爾時無尽意 [印①] 以偈問曰 世尊妙相具 我今重問彼 仏子何因縁 名為觀世音 具足妙相尊 偈答無尽意</p>	<p>汝聽觀音行 善応諸方所 心念不空道</p> <hr/> <p>弘誓深如海 歴劫不思議 侍多千億仏 発大清浄願 我為汝略説 聞名及見身 能滅諸 [印②] 觀世有歴思 世無物不音 色子書々在</p> <hr/> <p>不觀所依法 所般地三諸 仏故有知不 [印①] 空菩之提行 培若薬不夢 羅阿火多故 負般薬心呪 觀經銀世尽</p> <hr/> <p>不不中々五 故仏有行見 亦不月空苦 菩至加不空 深是所利度 [印①] 垢依尺照利 識以三実子 等無下波中 滅智其色亦 色亦有不空</p> <hr/> <p>觀音石金不</p>	<p>音不角能々 或囚三毛心 禁枷所不切 [印①] 鎮手足存無 念彼拾所偈 觀音五苦受 音力右觀音 念諸木提行</p> <hr/> <p>虬及大羯遠 氣行杉無想 常滅大眼舎 妙破左昧即 [印①] 普門堂蜜色 神通蔵多利 觀音地倒空 法智里故行</p> <hr/> <p>刹量一知実 勿生上無呪 衆不道心行 [印①] 修行右善故 大智門心行 諸苦裏品重 空外家天身 大然岡願劫 時去長不方 [印②]</p> <hr/> <p>真多是大神 是大明呪無 一切苦多故知 蜜多 [印③] 心經</p> <hr/> <p>菩提薩婆 詞 [印①]</p>
---	---	--

第三 香組 [印①] 天草奈留島	十戒 [印②] 一 御一体でうすうやまいたつ とみ奉る 二 尊きみなにかけみなじげん しかいをするべからず 三 とみんこをいわみ日つとめ まもるべし 四 父母に孝行すべし 五 人を殺すべからず 六 しやいん犯すべからず	夢々 深自観拔行 有無利 般在空十々 二多亦 色菩厄八子 内不行 法薩不子不 之味皆 無行共金行 洞行不 生切見東滅 裏心所 空多五十大 家罣一 色度不五空 作是空 不般空刀色 源渡故 是大明呪是 無上呪 [印③] 菩提薩婆訶
2) サンタ・マリア館所蔵文 書84 [印①] 天草奈留島 [印③] 相之浦 寿庵 御領組 大庄屋 組頭 契利斯督 [印②] 三大丸や 寿庵 中村清三郎 御領組 長岡五郎左エ門 大庄屋	七 ちゅう盗すむべからず 八 人のざんおかすべからず 九 たのつまをかいすべからず 十 だいのためたがうみだにの みむべからず 右とふめん [印③] たつとき■■■かり 存居申し候 あんめんじんす あんめんじんすあんめんじんす あんめん	三太丸矢 [印②] あめまるや からさんべんのふど ふまんべゑこゑ れんこ つふやゑれん こむりこむり ゑれしべ ゑんつうふりつう うべんつうつふ ゑのじんぞう さんたまるや
吉田安左エ門 組 頭 為五郎 新 吾 長次郎 源 作 兼右エ門 格れ長老 [印①] 徳克和尚 運了和尚	天主其人に代りて、其 力を合せて 苦受く此か 故にその人苦 悩頓に脱し 刹那の頃天 上に生じ快 楽を受く [印①] あんめんじんす	まあくるまあくる うらひらのふのふ べすのふべこ とりゑののみきり ゑのつ丸山土野 士あんめしす あめまるや あんめんじんす さんたまるや 天主様 [印③]

あんめん あんめんあんめん	の生に於てかこの 身を度せん 大衆諸共に	道を体解して 無上意を発さん 自ら主に帰依 し奉る [印②]
帰依三宝 人身受け難し 今既にうく法 聞き難し今既 に聞く此の身 今生に度せずん ば更に何れ	至心に三宝 に帰依し奉 る自ら主に 帰依したらし奉る 当に願わくは 衆生と共に大	天草内奈留島 相之浦村 [印③] 寿庵中村清三郎

2. 内容の考察

1) 印章

印章は全部で3種類あり、いずれも文書83と84に押されているが、その数や場所は異なる。

印①：正方形。右半分に大きな「十」、左半分に「天草」（図18）

印②：縦長方形。「十」字で印章を左右二分し、下部の右に「天」、左に「草」（図19）

印③：正方形。右半分に「奈留」、左半分に「天草」（図20）



図18 印①



図19 印②



図20 印③

印章の数は、文書83が①9カ所、②3カ所、③2カ所、文書84は①3カ所、②4カ所、③6カ所、である。数で見ると文書83が天草、文書84が奈留とのかかわりが強いように思われる。キリシタンが用いたとされる十字の記号は、館藏品にも数例見られた。十字の記号はキリシタンに限られたことではないが、全国の近世キリシタン墓碑、遺物に見られるという¹¹⁾。ただ浜崎館長の話では、こうした印章が押された文書を他に見た記憶はないとのことであった。文書に方印が無造作に押される例は中国や朝鮮では珍しくないが、近世の日本にそうした伝統があったとは思われない。近代以降、私的に製作したものであろう。

11) 松田毅一「キリシタン宗門と十字の記号」（『キリシタン研究 第二部論攷篇』、風間書房、1975）

2) 地名

地名として登場するのが天草、奈留島、相之浦(村)、そして御領(84のみ)である。天草は無論天草であり、御領は天草御領村を指すと見て問題ない。一方奈留島は五島市(五島列島)の中央部にある島で、相之浦とは相ノ浦、現在の五島市奈留町浦郷内の地名である。奈留島もキリシタンが多く残っていた場所で、五島列島におけるキリシタンの密度が最大の島とも言われ¹²⁾、18世紀の末から大村藩から数千人もの百姓が移民し、その中にキリシタンが大勢いたという¹³⁾。天草と奈留島の関係については、明治末期において奈留島が天草(牛深)の鰹漁に対する生餌の供給地の一つであったことが知られているが¹⁴⁾、それほど多くの交流があったようではなく、人の移動や宗教的交流に関する詳しい情報は得られなかった。

3) 組織

(1) 組

両文書には「組」という組織が登場する。文書84の組は、人名から村落の代表者(庄屋)などで構成される組織である(人名については後述)ことが分かり、キリシタンとは無関係と思われる。

文書83には、冒頭の「松組」と「花組」、そして最後の「第三香組」が見られる。松組は男、花組は女とあり、組が男女別であったことが分かる。松組は毎月10日、花組は毎月20日という記述がある。毎月10日に行なう行事は、キリシタンの日繰りなどには見出せず、その性格は不明であるが、それぞれが何らかの行事を担当していたのであろう。花組には「八十七人」の組員がいたとあるが、「第三香組」とはその中の小組織であろうか。

組とキリシタンの関係で想起されるのが、コンフラリア(Confraria = ポルトガル語、信心講・組)である。コンフラリアとは、キリシタンの信仰を維持するため、日本にあったキリスト教団が組織した平信徒の信仰的団体であった。組は親組、大組、小組からなり、大組は小組の集まり、親組は大組の集まりであった¹⁵⁾。

天草においてコンフラリアが最初にできたのは慶長元(1596)年、志岐の「信心の組」であった。文化2(1805)年の天草崩れの際には、大江、崎津、今富にそれぞれ「上組」・「下組」があり¹⁶⁾、また明治・大正期の今富村には、水方が2人と宿老と呼ばれる役名の人5人、その下に「コンパイヤ」と呼ばれる小さな講が十数組あった¹⁷⁾。一方、長崎の生月島のキリシタンには、男組と女組に分かれ、毎月初めの日曜日に「お札」なるものを引く儀式があった¹⁸⁾。ただし文書83の組は、その名称からしていわゆる従来のキリシタンの敬虔な信仰の集いという印象は受けない。

12) 田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』(日本学術振興会, 1954), 30頁

13) 田北耕也「五島のキリシタン」(『切支丹風土記(九州編)』, 宝文館, 1960), 303~304頁

14) 内藤莞爾「奈留島キリシタンの家族分封」(『哲学年報』38, 1979), 7~8頁

15) 今村義孝『天草学林とその時代』(天草文化出版社, 1990), 218~220頁。

16) 浜崎献作『天草の伝承キリシタンとオラショ』(サンタ・マリア館, 2003), 244頁

17) 浜崎(前掲書), 262頁

18) 助野健太郎「生月の切支丹」(『切支丹風土記(九州編)』, 宝文館, 1960), 101頁

(2) 人物

文書83には女性の名が登場し、「右七人」とあるが、実際には6人のみが列記されている。文書84には男性の名が綴られている。そのうち数名については、それとおぼしき人物が存在したので、列記する¹⁹⁾。

- 長岡五郎左エ門：文化元（1804）年の十組大庄屋に挙げられた御領組御領村大庄屋の長岡五郎左衛門か。ちなみに五郎左衛門の名は9代興道（1749～1815）、10代興生（1794～1830）、11代興就（～1869）が使用している。
- 為五郎：文化元（1804）年の十組大庄屋に挙げられた志岐組の庄屋、平井為五郎か。
- 新吾：文化元（1804）年の十組大庄屋に挙げられた久玉組の庄屋、中原新吾か。
- 源作：寛政8（1796）年の記録に見える大江組高浜村の庄屋、上田源作か。
- 兼右エ門：万延元（1860）年の記録に見える大矢野組合津村庄屋、岡部謙右衛門か。

彼等の活動時期は1800年前後～19世紀後半までと幅広いが、兼右エ門を除けば1800年前後である。岡部とは別人であるかもしれない。

一方冒頭と最後に登場する「寿庵中村清三郎」は他の資料で見出せなかった。寿庵はジョアンつまり洗礼名と思われ、キリシタンであろう。文書の最後に「天草内奈留島相之浦寿庵中村清三郎」とあり、彼が奈留島出身者であることをうかがわせる。ただ当時、天草の庄屋からなる組にキリシタンが名を連ねるとするのは考えにくく、作成者が何らかの理由で彼等を結びつけたのであろう。

最後に「格れ長老」として徳克和尚・運了和尚が登場する。長老の語は古くからあり、禅宗では年長者の意でも用いられる。彼らは和尚、つまり僧侶と考えられるが、天草の主な寺院の住職にその名を見出すことはできなかった²⁰⁾。気になるのは長老に冠された「格れ」の二文字である。この「格れ」が隠れ、すなわち隠れキリシタンを指すものであるとすれば、長老もまたキリスト教における長老制度にちなんだ表現の可能性がある。ただキリシタンの指導者・職能者は水方や帳方と言い、長老の名で呼ばれてはいない。これらの推測が正しいとすれば、明治以降のキリスト教の概念から影響を受けていることになるが、断定はできない。

4) 教典

(1) 経文

文書83には一見して経文と分かる文が登場するが、冒頭に見える「爾時無尽意～能滅諸」の下りは妙法蓮華経観世音菩薩普門品、いわゆる観音経の冒頭部である。ただオリジナルとは若干の異同がある。まず観音経は「爾時無盡意〔菩薩〕以偈問曰」と菩薩が入るが、文書83にはそれがない。また文書の「心念不空道」の道は観音経では「過」である。ちなみにこの「心念不空過」は、観音経では「聞名及見身」の後に入る。引用の末尾となる「能滅諸」の句は、本来「能滅諸有苦」であり、意味が途切れている。

19) 松田唯雄『天草近代年譜』（みくに社、1947）の（一）天馬高踏篇、（二）双矢放弦篇の内容に基づく。

20) 松田（前掲書、1947）および天草史談会（前掲書、2004）による。

文書83はこれ以降も『大般若波羅蜜多經』や『般若心經』などの用語が登場するが、經文の引用ではない。最後に「蜜多心經」の字があり般若心經が基になっていることをうかがわせるが、文は心經の写しではない。

このように文書83には仏教にかかわる文がほとんどであり、キリシタンを思わせるものは冒頭の「契利斯督」・「天主」・「三太丸矢様」のみである。これらを基に考えると、女性の組構成員がキリシタンであったとは考えにくい。女性からなる仏教信徒の講であろうか。ただ十字架の印章があることを考慮すれば、キリシタンと無関係だと断定することはできない。

文書84には「夢々」と題した仏教の經文らしきものが登場するが、仏教經典の引用ではなさそうである。ただ二列目の文字が横に「自在菩薩行」と般若心經の一節になるのは偶然の一致なのか、よく分からない。

文書84には、キリシタンを想起させる内容が多く登場する。以下、それらについて述べていく。

(2) 十戒

文書84には「十戒」なる言葉が登場する。十戒とは、旧約聖書出エジプト記において、モーセが神から授かった十カ条の守るべき掟であり、同文はそれが短くまとめられたものである。日本で最初に登場するのは『どちいなきりしたん』と考えられるが、それ以外にも参考として全4例を挙げておく。①～④はそれぞれの典拠の題目である。

- ①「デウスの御掟の十のマンガメントの事」²¹⁾
- ②「お授けなる十ヶ条の御おきてのまだめんとの事」²²⁾
- ③「まりでうすのご掟のとうのなだめんとの事なり」²³⁾
- ④「十戒」(文書84)

第一

- ①御一体のデウスを敬ひ尊み奉るべし
- ②御一体のꝛ(デウス記号)をうやまひたつとみ奉るべし
- ③ご一体のでうすを万事にこいてご大切にうやまいたつとみ奉るべし
- ④御一体でうすうやまいたつとみ奉る

第二

- ①貴き御名に懸けて、空しき誓すべからず
- ②ꝛのたつとき御名にかけくむなしきちかひをべからず
- ③たつときみなにかけ みなちくちくきや すべからず

21) 文禄元(1592)年天草版『どちいなきりしたん』(原文はローマ字。東洋文庫『吉利支丹教義の研究』, 1928), 62頁

22) 慶長5(1600)年版『おらしよの翻訳』(天理図書館『おらしよの翻訳』, 八木書店, 1976)。

23) 生月島山田集落の人から聞き取った録音記録(田北耕也, 前掲書, 1954), 386頁

- ④尊きみなにかけみなじげんしかいをするべからず

第三

- ①ドミンゴいはひびを勤め守るべし
- ②御祝日をつとめまもるべし
- ③どめご祝日にはつとめを守るべし
- ④とみんこをいわみ日つとめまもるべし

第四

- ①汝の父母に孝行すべし
- ②父母にかうかうすべし
- ③汝がちちははにはこうこうすべし
- ④父母に孝行すべし

第五

- ①人を殺すべからず
- ②人をころすべからず
- ③人もころすべからず
- ④人を殺すべからず

第六

- ①邪淫を犯すべからず
- ②じやいんをがすべからず
- ③じゃえんなおかすべからず
- ④しやいん犯すべからず

第七

- ①偷盗すべからず
- ②ちうたうすべからず
- ③ちゅうとうすべからず
- ④ちゅう盗すむべからず

第八

- ①人に讒言をかくべからず
- ②人にざんげんをかくべからず
- ③ひとのざんぎもかくべからず

④人のざんおかすべからず

第九

- ①他の妻を恋すべからず
- ②他のつまをこひすべからず
- ③他のつまにこいをすべからず
- ④たのつまをかいすべからず

第十

- ①他の財を妄に望むべからず
- ②他物をみだりにのぞむべからず
- ③他のたからをみだりにのぞむべからず
- ④だいのためたがうみだにのみむべからず

④は第二、第三、第八、第十において、オリジナルとは異なる意味になっている。方言による変化もあるため一概に誤りとは言えないが、聴いたまま書き出し、理解できる範囲で文章にしたという印象を受ける。

年代の手がかりとなるのは④の冒頭にある「十戒」の文字である。①～③においては、表題が「(十の)掟」であり十戒ではない。十戒の語への変化は、聖書の漢訳、邦訳が背景にあるようである。ロバート・モリソン訳『旧遺詔書』(1823年)には「十条誠命之言」、E.C.ブリッジマンほか訳『旧約全書』(1863年)には「十誠」とあり、以降日本で刊行される多くの聖書は「十誠」の訳語が多く用いられる。江戸時代の日本で旧約聖書が翻訳・出版された形跡はなく、キリシタン信仰における十の掟は、旧約聖書の邦訳を受けて十誠の名へと変化したようである²⁴⁾。文書83の作成者は、明治以降のキリスト教の布教とそれに伴う用語の変化から影響を受けていることが分かる。

(3) アヴェマリア

文書84の「あめまるや～あんめんあんめん」の下りはいわゆる「アヴェマリア」(天使祝詞)のオラシヨである。天草におけるアヴェマリアは「経消し」のオラシヨとしても知られている²⁵⁾。「経消し」とは、キリシタンの葬儀を仏式で執り行う最中、隣の部屋で地区のキリシタン指導者が聖水を入れた壺に向かって十字架を出し入れしながらオラシヨを唱えた行為である。キリシタンの人々はこれによって仏教の経の力を消し去り、死者が仏教における彼岸ではなく、キリスト教の天国に行けるものと信じたのであ

24) プチジャン司教が長崎で刊行した『聖教日課』には、「十ヶぢよふのもふしあげ」(1868年版)、「天主(「でうす」とルビ)十誠」(1874年版)とあるという(田北耕也, 前掲書, 389頁)。邦訳聖書に基づき、用語の変更がなされたことをうかがわせる。

25) 浜崎(前掲書), 147頁

る。この経消しに唱えられたアヴェマリアは、実は宣教師時代に一番多く祈られたオラシヨの一つであるという²⁶⁾。現世の苦しみから解放され、天国に行くことを渴望したキリシタンにとって、アヴェマリアは仏教の力を打ち消す強力なオラシヨとして認識されていたのであろう。

問題は文書84のオラシヨがどこのものであるかである。比較のため、アヴェマリアのオラシヨを調べたところ、書籍や資料などから14例を拾うことができた²⁷⁾。以下、それらを列挙する。

- ①あべまりやがらしやへれな。だうみぬすてゑくんべねぢたつういんむりゑりふす。ゑつべねぢづすふかつすべんちりすつうい。ぜすゝさんたまりやまあてろでい。おらおるなうびすぺったうりぶす。ぬんくゑついんおらもるちすなうすてれ。あめん²⁸⁾
- ②あめまるや からさべんのふ どふまん べゑこ ゑれんと つうや ゑれむり ゑれむり ゑれすべ ゑんつう ふりつう べんつう つうゑノじんぞう さんたア丸や まあてる まあてるうらひらのふのべす のふべこ とりゑの のみきり ゑのつ九 山土野の土 あんめんじんす²⁹⁾
- ③あべまるや。がらさア。べんのふ。とをミンていこう、ゑれんた。ゑれんた。ゑんつア。べんつう。つうゑん。じんづう。さんたアまるやア、まあてる。のふべフ、のふべニ、とうゑの。のみきり。ゑのつう。おやまのつう。あんめんじんす³⁰⁾。
- ④アメマルヤ、カラサベンナンドウマン、ベコウヤベンナンツウヤ、イレモイレモイレツベシンツ、フウツベン、ツウヤジンヅ、サンタマルヤマヲテウラ、ベクワクトエルク、タンキリエノツツ、オイヤモツツツモワワオオンメンジスマリヤオンメリジス、マリヤキリリツ、キシツリツキリリツ、ベデークツ³¹⁾
- ⑤あめまるやからさへんなとうまんてらゑれとつやゑれむりしゑすへひれニへんつうしふつうへんつうつうゑのじんすふ三太丸や山てるしのへすのふ浦へすのみきりゑんつう野山つうあんめんじんす³²⁾
- ⑥アメ丸ヤ。ガラサアベンナン。ドウマンテエクウ。エゝントツウレヤア。エリモノエリモノ。エノスベゼンツウ。シツツウ。ベンツウ。ツヤアジンゾウ。サンタ丸ヤア。ヤマアテツテル。ウラベスノ。ノウブカ。ノウビカ。トウリイヤア。ノウキリエノツチ。ヲヤモロツチ。アンメンゼンスアンメンゼンス³³⁾。
- ⑦あめまりや、かわだ、さべ、にや、とよまんねこ、いれもん、いれもん、いれす、べんつ、ふらつ、べんつ、つや、ぜんつ、さんまるや、まで、でう、だべか、のべつのべかん、とりえ、のん

26) 浜崎（前掲書），147頁

27) 同じ地域で1～2文字程度しか差のない例は除いている。

28) 慶長5（1600）年版『おらしよの翻訳』（前掲書）。ちなみにこの冒頭には本来、十字架の記号が付されている。

29) 天草大江。「文化二年 大江村宗門心得違之者御吟味日記」平左衛門寿庵申口（九州大学九州文化史研究所内九州史料刊行会編『天草古切支丹資料（一）』，1959），78頁

30) 天草大江。「文化二年 大江村宗門心得違之者御吟味日記」（前掲書，1959），75頁

31) 天草大江。下田曲水『天草切支丹史』（熊本図書館館友会，1941），386頁

32) 天草大江。「文化二年 大江村宗門心得違之者御吟味日記」（前掲書，1959），80頁

33) 天草高浜。「文化二年 宗門心得違調方口上書帳 丑六月」（九州大学九州文化史研究所内九州史料刊行会編『天草古切支丹資料（二）』，1959），38頁

きえのつつ、もをつづ、のをつづ、あんめんで³⁴⁾。

- ⑧アンメマルヤカラシヤブ子ニトヲニステテクヒラレテイビイビラレテツイルムイルクロスウヒン
スウサンタマルヤ ヒイリマバアテンハアテンウラウラセケツジトヲレバノンキウヒスヒラトヲ
レバノンキウイチノウラ³⁵⁾
- ⑨アベマリア、カラシヤペーナ、ドメチヤークー、ベラツト、ツヨー、イーモノイレベツ、エキレ
ン ज्या、ツグロツ、ベンケー、ゼズス、サンタマリア、ビルゴーマンノ、オークランノ、デン
デンデンノ、ゲンガトリヤノ、ノンキノイーモー、ノステラ、アンメン、ゼズス³⁶⁾。
- ⑩まりやめまりや、がらっさびんな、どーみのていこーべれんつつーわー、いつもんいりびず、よ
つめんれつ、ふーつるべんつーいーつーわー、ぜぞさんたまりや、びんごんぱーてろ、でーおー
らーのーびず、びかとーろ、びすのんきんのーりゃー、申しつるしのうしつるし、あんめーずす³⁷⁾
- ⑪アベ、マリア、ガーラツサ、サーベンナ、ドーベス、ペーコ、ベレントツア、イーモリ エベ
レス、ベレントヲツネ、ベーツローツベンツル、ヒツル、ジズー、サンタマリア、ビルゴ、パー
テル、ノーベス、スベカタ、ナンキンノーリヤ、モスツリ、ノスツリ、アメン ジズー³⁸⁾
- ⑫アベ、マリア、カーシヤベナ、ドメ、デコノモノ、イツキ、イキリン、 ज्या、ナベツ、クロツ、
ベンケベツ、セツサツ、サンタマリヤ、オンハハサンタマリヤ、デンデン、デグロス、ナンキン
モンツラ、アメン、ジヨス³⁹⁾
- ⑬アベマリア、カシヤベナ、ドメジャコ、コベナヅド、ツヨイモ、ナレントツ、クロンツ、ベンケベ
ンツ、オンハハ、サンタマリヤ、ラクランドハ、テンゲン、ドーリ、ナンキリモンヤ、アメン、
ジヨス⁴⁰⁾
- ⑭アメ、マリア、ガラシヤ、ベレノ、ドーメツ、テーコン、ニメデテ、エルマノ、エルメシ、イチ
ベンデーヅツ、フローツツ、ベンチリス、トヤ、ジズー、サンタ、マリア、ビルコ、アマハツテ、
テンヤウ、ラクラノ、ノーベス、ベカトーベス、オンコヲ、インノ、イノウラ、モースチリス、
ノスチリス、アンマ、オランメ、ジゾース、アリマサマ⁴¹⁾

これらは九州に伝わるオラシヨのほんの一部であるが、地域によって文字数や区切り方に相違のあることが分かった。ここでは便宜を図るため、特に前半部を本来のアヴェマリアの読みに従って区切り、その文字数を比較した。その結果は表の通り。

34) 天草崎津。浜崎（前掲書）、351頁

35) 長崎大村。「外目沖島之者邪宗方口書之事」（山口宅助『大村藩古切支丹研究資料』、カトリック中央書院、1937）、244～245頁

36) 長崎外海。浦川和二郎『切支丹の復活 後編』（日本カトリック刊行会、1928）、847頁

37) 生月島山田集落。田北（前掲書、1954）、407頁

38) 平戸根獅子。浦川（前掲書）、903頁

39) 五島有福島。浦川（前掲書）、848頁

40) 五島奈留島。浦川（前掲書）、847頁

41) 福岡今村。浦川和二郎（前掲書）、903頁

表 アヴェマリアのオラシヨの比較

	フレーズ①	字数	フレーズ②	字数	フレーズ③	字数	フレーズ④	字数	フレーズ⑤	字数	総字数	グループ
“サンタマリア館 所蔵文書”	あめ まるや	5	からさん べんのふ	8	どふまん べゑこ	7	ゑれんこ つふや ゑれんこむりにむりゑれし	19	べゑんつう ぶりつう べんつう つふゑのじ んぞう	22	61	A
ラテン語原文	Ave Maria		gratia plena		Dominus tecum		benedicta tu in mulieribus		et benedictus fructus ventris tui Jesus			
①『おらしよの翻譯』	あべ まりや	5	がらしや へれな	7	だうぬす てゑくん	9	べねぢた つう いん むりゑれふす	14	ゑつ べねぢつす ふかつす べんぢりす つう い ぜす、	22	57	A
②天草（大江）	あめ まるや	5	からさ べんのふ	7	どふまん べゑこ	7	ゑれんと つうや ゑれむりゑれむりゑれす	18	べゑんつう ぶりつう べんつう つうゑん じんぞ う	21	58	A
③天草（大江）	あべ まるや	5	がらさア べんのふ	8	とをまん ていこう	8	ゑれんたゑれんた	8	ゑんつア べんつう つうゑん じんづう	16	45	C
④天草（大江）	アメ マルヤ	5	カラサ ベンナン	7	ドウマン ベコウヤ	8	ベンナン ツウ ヤイレ モイレモイレツ	16	ベジンツ フウツ ベンツウヤ ジンツ	15	51	B
⑤天草（大江）	あめ まるや	5	からさ へんな	6	どうまん てら	6	ゑれと つや ゑれむりしゑす	12	へひれこ へんつうし ふつう へんつう つうゑ の じんすふ	24	53	B
⑥天草（高浜）	アメ 丸ヤ	5	ガラサア ベンナン	8	ドウマン テエクウ	8	エント ツウレヤア エリモノエリモノエノス	20	ベゼンツ ウシツツウ ベンツウ ツヤア ジンアウ	20	61	A
⑦天草（崎津）	あめ まりや	5	かわださ べにや	7	とよまん ねこ	6	いれもんいれもんいれす	11	べんつ ぶらつ べんつ つや ぜんつ	14	43	C
⑧長崎（大村）	アンメ マルヤ	6	カラシヤ プ子ニ	7	トリスステク	7	ヒラレテイビイラ	9	レテツ イルムイルクロスウヒンスウ	16	45	C
⑨長崎（外海）	アベ マリア	5	カラシヤ ベーナ	8	ドマチ ヤーク	7	ベラット ツヨ	15	エキ レンジャツ グロツ	18	53	B
⑩生月（山田）	まりやめ まりや	7	がらっさ びんな	7	どーみの ていこ	8	べれんつ つーわー いて もんいりびす	16	よつめんれつ ふーつる べんつーいー つーわ ー ぜす	22	60	A
⑪平戸（根獅子）	アベ マリア	5	ガーラツサ サーベンナ	10	ドーバス ベーコ	7	ベレント ツーア イー モリエベレス	15	ベレントツツネ ベーツローツ ベンツルヒ ツル ジ ズ	23	60	A
⑫五島（有福島）	アベ マリア	5	カーシヤ ベナ	6	ドメ デコ	4	モノイツキイキンジヤナ	13	バツ クロツ ベンケバツセツバツ	14	42	C
⑬五島（奈留島）	アベ マリア	5	カシヤ ベナ	5	ドシヤ ココ	6	ベナツド ツヨイモナ	9	レンツ クロンツ ベンケベソ	13	38	C
⑭福岡（今村）	アメ マリア	5	ガラシヤ ベレノ	7	ドーグツ テーコン	8	ニメテテ エル マノエルメシ	12	イチ ベンデーツツ フローツツ ベンチリス トヤ シノ	23	55	B

これらは字数によってA) 60字前後, B) 51~55字, C) 45字以下の3つに分類することができる。まず『おらしよの翻訳』は、アヴェマリアのラテン語音を最も忠実に再現したものであろう。各オラシヨはこれを起点にしていると思われるが、その区切り方が『おらしよの翻訳』とは異なる点が見られる。一見してラテン語原文の意味が理解できていないことが明らかであり、まじないと化しているが、特にフレーズ④とフレーズ⑤において大きな差が出る。後半部ほど記憶が曖昧になり、変容の度合いが増すのであろう。さらにまた長い年月による変化や、伝承者による調子や拍子の付け方が、各地域の個性を生み出していったのであろう。

『おらしよの翻訳』は57字と字数面ではAグループに近いが、Aはフレーズ④とフレーズ⑤に繰り返しの言葉が入って語数が増えており、その内容はかなり異なる。次にCグループは明らかに伝承の過程で語数が減少しており、特にフレーズ④においてラテン語原文との対応が難しい。Bグループは他に比べ、オリジナルとの対応がしやすい。

問題となる文書84のアヴェマリアはAグループに属し、天草大江村のものに酷似している。従ってこのオラシヨは天草のものであって奈留との関係は薄いと考えられる。

地域別に見ると、天草はA・B・Cが、長崎はB・C、五島はCのみ、平戸・生月はA、福岡はBのみである。事例が少ないため現段階では参考程度にしかならず、今後も引き続きオラシヨの事例を収集していくことが望まれる。ただ天草(C)と奈留のオラシヨには、語彙にかなりの相違が見られ、両者の類似性を想定するのは難しい。

(4) 帰依三宝

文書84の「人身受け難し〜帰依し奉る」の下りは、華嚴経や法句経、禪語録などを参考にして作られた文で、多くの宗派で読まれているが、名称は宗派によって「三帰依文」・「三宝帰依」, 「礼讃文」, 「帰敬文」, 「三帰礼文」など様々である。興味深いのは、本来「自ら仏に帰依し〜自ら法に帰依し奉る」であるものが、文書84では「自ら主に帰依し〜自ら主に帰依し奉る」と「仏」が「主」に置き換えられている点である。作成者が仏教信者でないことを表明したものと言えよう。

ところで筆者が確認し得た同文の初出は『仏教聖典』(1905年)で、タイトルは「礼讃文」であった⁴²⁾。著者はいずれも真宗にゆかりある人物である⁴³⁾。また昭和7(1932)年版『真宗聖典』にも礼讃文とある。20世紀前半までは礼讃文と呼ばれていたものが、各宗派が同文を取り入れていく過程で名称を異にしていたのであろうか。現在同文を「三帰依文」・「三宝帰依」と呼ぶのは真宗大谷派のようであるが、同宗派がその名を用い始めた時期を見出すことはできなかった。ただ本文の「三宝に帰依し」をタイトルに用いた可能性もあり、真宗からの影響であるとは断言できない。

42) 前田慧雲・南条文雄『仏教聖典』(三省堂, 1905)の附録の項に収められている。

43) 前田慧雲は龍谷大学学長を務めた人物で、真宗本願寺派第22世法主大谷光瑞の師でもあった。南条文雄は真宗大谷派系の寺に生まれ、後に大谷大学教授となっている。

4. まとめ

以上の考察から、筆者が両文書について考えた結論は、次の通りである。

まず文書84の最終的な作成時期は、用語の使用法などからみて20世紀以降と思われる。これは登場人物の生存年代より約1世紀遅いことを意味する。作成者は中村清三郎にゆかりのある天草もしくは奈留島出身のキリシタン（もしくはキリシタンであった人物）である可能性が高く、過去を回想しつつ、自らの知識を個人的に書き留めたものではないだろうか。また文書84の人名は、キリシタンと庄屋という構成から考えると、単一の組織・集団であったとは考えられない。

文書83は、女性からなる香組（もしくは花組）の活動を目的として作成されたものと考えられる。この組は仏教の講のような印象を受けるが、それ以上は不明である。近代以降の特殊な状況（戦時下など）において作られた私的な組織の可能性も想定しておきたい。

印章は特殊な要素であり、同時期に同一人物によって製作され、両文書に落款されたものと思われる。ただ文書は筆致を異にする字が数点あり、同一人物の作であるかどうか判別しがたい。だがいずれにせよ、文書83と文書84に登場する組は性格を異にすると考えてよく、両文書は対をなすものではない⁴⁴⁾。

文書には、キリシタン信仰と仏教信仰が混在していた。文書84にはキリシタン信仰の痕跡が色濃く認められるが、近代以降のキリスト教の知識もかいま見られた。例えばこの文書に登場する奈留島相ノ浦において先学が調査したキリシタンの中には、祖先の守った宗教はどうしても捨てられないとし、改宗せねばならないなら、仏教か神道の方がよいという人もいたという⁴⁵⁾。同文書は、そうした個人のアイデンティティの軌跡と捉えられなくもない。

両文書には不明瞭な点が多い。これらの内容をすべて想像の産物と見なすことも不可能ではないが、偽物の作成を目的とした文書にしてはやや特殊な気もする。いずれにせよ現時点では真偽を判断する材料が不十分であり、原本を実見し、精査する必要があると思われる。

おわりに

近世の天草の民は、支配層からの搾取や重税に苦しんできたという。信仰はそうした人々のよりどころの一つであり、恐らく天草の人々の生き方、考え方にも大きく影響を与えてきたものと考えられる。特に近世におけるキリシタンが、差別意識、寺社信仰との相互依存など、社会の底辺に絶えずかかわってきたであろうことは、天草の歴史において注目すべきである。彼等自身が残した記録がほとんどないため、信仰のあり方はなかなか見えてこないが、決して忘れてはならない存在である。

朝鮮史を専攻とする筆者にとって、日本における本格的なフィールドワークは初めてであった。キリシタンのような信仰のあり方は前近代の朝鮮史には見られないため、天草の調査は非常に興味深く、貴重な経験となった。民間信仰の伝統を守り、人々に伝えていこうとする地元の人々の努力にも感銘を受

44) 文書には、作成者のものとは別に、「男組」（文書84）・「女組」（文書83）の注記がある。誰かが整理のために付けたものと思われるが、両者のセット関係を想定したものであるかどうかは分からない。

45) 古野清人『隠れキリシタン』（至文堂、1959）、236～237頁

けた。残念なのは、筆者の力不足から、寺社調査で得た古文書資料の紹介ができなかった点である。これについては、当拠点の専門家による成果報告を待ちたい。ご理解と協力を賜った現地の方々に感謝申し上げます。

また資料を筆者なり分析してみた。これまでに培ってきた手法がどの程度通用し、それが天草研究にいかほどの寄与をなすのか、甚だ心許ないが、外からの視点の一つとして何かの契機となれば幸いである。